

次回企画展予告

第18回企画展

朝鮮陶磁シリーズ-12

「李朝水滴展」

前期：昭和63年4月12日(火)～7月10日(火)

後期：昭和63年7月12日(火)～10月2日(日)

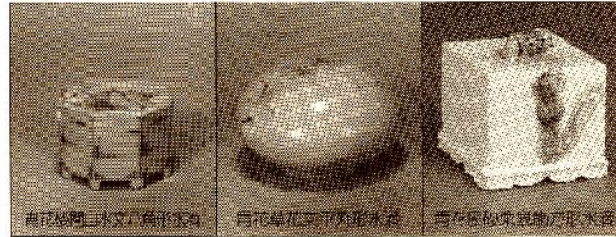
会場：当館企画展示室

■「李朝水滴展」

高麗から李氏朝鮮(李朝)への王朝の交代は、国の指導理念である仏教から儒教(朱子学)への転換を意味する。従って、僧侶に代って儒者が多く輩出し、一般の人々の生活にも儒教的な雰囲気次第に浸透してきた。その一つに、教育の奨励があり、必然的に文房具の生産が足された。文房具の内でも水滴は、種類と数量の点で最も多く生産され、今日遺品も一番多く残っている。水滴は硯に水を滴らす器ということで、当初から硯滴と呼ばれていた。器形は、丸・角・花・輪・彫形等と、動物(蛙・鶏・牛・蝶・魚・海駄等)、果物(桃・柿・瓜等)、家、山等の形を写したものと等がある。文様は、これも器形同様に数も多いだけに実に多岐に亘っているが、まとまりとしては、山水・柳竹・野草・八卦文や、寿福字の吉祥文字、「天一生水」等の詩句を書いたもの等がある。絵付は、大旨簡略・奔放な描写が多いが、細筆で丁寧に描かれたものもある。水滴は、紙・墨・硯・筆の文房四宝に入らない遊動的な存在でしかない。しかし、水滴は文人墨客を始めとする多くの人々の手で愛玩されたものだけに、李朝の人々の思想・嗜好等がそこに色濃く反映し、李朝500年の文化の結晶の一つといえる。同展では、館蔵品を中心に、時代、器形、文様等の異なる作品170点を二期に分け展示し、研究と鑑賞に供する予定である。

(K)

李朝水滴展の主な出品作品



右から硯滴山水文の水滴、硯滴花鳥文の水滴、硯滴山水文の水滴

お知らせ

昨午秋の開館5周年記念「李朝陶磁500年の美展」は非常に好評を博し、他の地域でも開催してほしいとの依頼が寄せられました。検討の結果、下記の三会場にて、前回とほぼ同規模の展覧会を開催することになりましたのでお知らせ致します。

1. 福岡県立美術館

〒810 福岡市中央区天神5-2-1
TEL. 092-715-3551

会期：昭和63年4月29日(金・祝)～5月26日(日)

主催：大阪市立東洋陶磁美術館
福岡県立美術館
NH新館社

2. 山梨県立美術館

〒400 甲府市真川1-4-27
TEL. 0552-28-3322

会期：昭和63年8月21日(月)～9月25日(日)

主催：大阪市立東洋陶磁美術館
山梨県立美術館
日本経済新聞社

3. 横浜高島屋

〒220 横浜市中区南幸1-6-31
TEL. 045-311-1251

会期：昭和63年9月29日(日)～10月11日(火)

主催：大阪市立東洋陶磁美術館
日本経済新聞社

編集後記

3月5日の講演会には200余名の方が出席され、当日の厳しい寒さを吹きとばすような李先生の熱意がふれるお話しに真剣に目を傾けておられました。講演内容は原稿用紙にして80枚にも及びましたが、紙面の都合上、事務局の責任で大幅に省略させていただきました。不十分な点もあるかと思いますが御了承下さい。(O)

1988年3月31日発行(年4回)Vol.3-4(通巻11号)

大阪市立東洋陶磁美術館



友の会通信

ASSOCIATES NEWS

No.11

編集 大阪市立東洋陶磁美術館友の会事務局

発行 〒530 大阪市北区中之島1-1-26 TEL. 06(223)0055

美術館の舞台裏(8)

今回は、当館の常設展の展示方針についてお話ししましょう。前にも触れましたように展示、保存、研究、普及という博物館活動の中で、当館は鑑賞本位の展示活動に重点を置いています。東洋陶磁の美しきなり魅力なりを十分感得して頂くことが、鑑賞と研究の出発点であるとの考えから、当館の館蔵品のいわば精鋭ぞろいで常設展を構成しています。東洋の絵画や漆工品などのように、作製保存上から長期的展示が好ましくない場合を除いて、欧米でも常設展の展示内容は変えられないことが多いようです。それは美術館は、一時的な展示をする臨時の施設ではなく恒久的なものであり、また何時訪れても見惚れた作品がそこにあるという一種の安心感を与えることに一つの機能があるという認識から来ています。いわゆる名品と呼ばれる美術品は何持てても、何回見ても新しい感動を呼び起します。美術館は、その常設展示において一つの美の基準というものを絶えず提供している施設でもあるのです。こういった美術館のあり方に対する考え方とともに、当館の特殊な事情があります。第一に収蔵品の種類と点数からくる制約です。当館には約1,000点収蔵されていますが、東洋陶磁という分類に限られており、また1,000点のすべてが第一級というわけには参りません。B級、C級のものも含まれています。トップクラスのみ展示されている所へ、B級C級のものを選べると、たちまち展示のレベル全体が低下してきます。作品にもそれぞれ格があり、格が揃っていないところに一つの統一感が生じ、緊張感と呼び起すのです。第二に、企画展の中心になる展示品の確保です。当館は年に3回、企画展を開催しています。館蔵品を展示することが多いので、その時に目録紹介していない作品を出品することによって新鮮さを狙いたい。さもないと企画展の内容は陳腐なものになってしまいます。そのための予備軍を確保しているのです。第三に、当館は海外をふくめ、遠方からの観客が多いことです。初めにお越しになる方達の為に、常に最高の物を御覧頂きたい。しかしそれには数と質の限界があります。このような事情から常設展の内容をあまり変えていない現状について御理解願ければと思います。今後とも企画展を中心とした新しい展開に取り組んで行き度いと考えております。

大阪市立東洋陶磁美術館

館長 伊藤郁太郎

◆第9回講演会要旨◆

「李王朝と室町外交」

日時：昭和63年3月5日(土)

午後1時半～3時半

会場：中之島中央公会堂

講師：明治大学 講師 李 進熙氏

ただ今、ご紹介にあずかりました李でございます。今日は、開催中の「李朝器展」につながる話と申すことで、「李王朝と室町外交」というテーマを選びました。主として李朝の祭祀を生んだ時代、文化はどういうものであったかという事を中心に話を進めていきたいと思っております。

李王朝というのは1392年に、李成桂が高麗王朝を倒して建てた国です。李成桂が作った朝鮮国だから李氏朝鮮と並び、日本では略して李朝と呼んでいます。李成桂は都を開城からソウルに移します。ソウルというのは朝鮮語で都を意味していますが、本当の名称は漢陽で後に漢城とも呼ばれます。この王朝は、儒教を採り入れ、仏教を排除する政策をとり、特に第4代・世宗は、今日のハングルを制定したり、科学技術を発展させたりした英王ですが、この王は徹底した仏教弾圧を行っています。高麗以来、全国に沢山ありました寺院のうち36ヶ寺だけ存続を許し、その上寺の経済的地盤である土地を没収しています。そして日本の仏教寺院と違って、民衆と寺を完全に遮断し、人里離れたところに追いやり、信仰に生きる者だけのものにしてしまいました。

そして仏教の代わりに朱子学、いわゆる儒教を採り入れていきます。孔子、孟子の教えを広めるために、中央に成均館、地方に郷校を建てて、その浸透を図りました。身分は日本と同じように士・農・工・商の四民で構成されていて、士は日本の武士階級に当たりますが、刀をさす武士を士とするのは日本式の解釈で、本来の士は、読書をする人をして、朝鮮語では“ソンビ”といいます。彼等は科擧という国家試験を受け、これに合格した者が官僚として中央・地方に配置されます。その試験の内容は、孔孟の教えで、孔孟の教えがよくわかったものが科擧に合格します。科擧は3年に1回行われ、最終合格者は33名、年間11人しかなれないという難しいもので、今日の受験の比ではありません。合格すれば、両班の身分になります。しかし、3代に亘って子孫が合格しませんが、その家は両班の家、すなわちソンビの家とは言われないのです。うからかしておれません。崇文軒武という点で李朝と日本の士では大変な違いがあります。時が経つにつれ、儒教の思想が生活の隅々にじょじょに浸透して参ります。

(李行 同姓同本不娶) 省略

私は戦後ずっと韓国へ帰らなかったのですが、それは帰ると儒教的な束縛の強い祭祀をやらねばならないからです。これが嫌いで、旧正月と日盆、それに私から教えて4代に遡るまで、盆口には夜明け前からお祭りをしなければならぬ。4代のご夫

婦の命日ですから1年に8回めぐってくる。この他に正月と盆には、祭祀と2回のお参りが加わります。ずっとこの様な祭が続くわけですが、その煩雑さがいやで帰らなかつた。ご先祖には申し訳ないけれどもさぼってしまいました。

(内外の分) 省略

儒教の教えで重要な事の一つは、生活は質素であるべきでありまして、外見が華やかなことは絶対に許されません。まず男女の服装でカラフルなものはいけません。白か黒で、清潔ですが質素なものが原則です。家も小さく簡素に建てねばなりません。かつて柳宗悦は、これだけの焼きものの圧がどうして赤絵のようなカラフルな焼きものを作らなかつたのか。朝鮮は歴史的に余りにも他国に侵略された為に、色をも染しむ能力を失ってしまったのだらうと書きました。この頃、すなわち1920年代の前半ですが、柳は、李朝文化の基本に流れる美意識を知らなかつたからです。先程申し上げたように、カラフルなものを着るのは水商売の人で、普通の人は、女のは正月と春節の日に着飾るだけ、また死後の極楽に行く葬式のとさだけ襦袢を飾り立てるのです。生前は質素で、一歩引く美、慎しむ美、これが儒教の教えなんです。

ところで朝鮮社会に色彩が全くないかということ、そうではないです。内房、すなわち女中の館の部屋の中には、カラフルなものがありまして、女性の身の回りには華角盆のダンスのものさし、糸着があり、またカラフルな刺繍や民画の屏風等があります。すなわち、他人の入ってこない部屋はカラフルであります。一方、焼きものや男性の外(房)で使うもの、お客様の目に止まるものにはカラーリを使わないのが原則です。カラフルな赤絵がない理由がわかり向けたらと思います。

また儒教では、「長幼の序」というものをやかましく言いまして、言葉について申しますと、見も知らぬ人に会ったとします。その人が自分より10才位上なあと判断した時には、父親に対するように最上の敬語を使わなければならぬ。4才位上だと兄に接するように半敬語を使う。2～3才位上だと判断できれば友人に接する言葉、すなわち「君」とか「俺」を使うこととなります。ハングル語は難しいといわれるのは、この「長幼の序」が言葉の中に入ってきているから難しく感じる。これも先程の一步引くという感覚ですね。この感覚を理解するとき朝の文化は大変わかり易くなって参ります。

次に李朝と室町外交についてお話しします。高等学校の歴史の教科書を開いてみますと、室町時代について遠明使(通算18回)の話は沢山出て参ります。しかし、朝鮮との関係については一言も触れていません。教科書によっては、対馬が朝鮮と貿易をしたという程度のことを書いてあるにすぎない。これはたいへんな間違いでありまして、金剛寺を作った足利義滿が、1404年に朝鮮に正式の日本国大使を派遣している。天皇の名ではなく、日本国王として寄している。そして、足利義満の滅びる迄の160年間、派遣した使節は実に67回に及んでいます。一方、この年に初めて遠明使を送っていますが、1回の使節団の人数は約100人で、160年間に韓国へ行つたのは1800人です。ところが、朝鮮には年間5000～6000の日本人が往復しております。この両国の外交は全く対等の関係にあります。

そして朝鮮では日本からの使節を4ランクに分けていました。トップは足利將軍の日本国大使、2番目は京都の公家・大寺社及び大大名、3番目は九州探題、対馬の宗氏や西国の豪族、4番目が元海賊の親玉等であります。これはハングル付をする理由が

あるのです。釜山には迎賓館の樓館が設けられていて、後に熊川の齊浦と蔚山の温浦が追加されます。使節が樓館につくと、ランクによって接待の中味が違い、全ての使節をソウルに送っていたのですが、都や道中での接待費がたまりませんから上京の人数に制限がありました。日本国大使以外は上京の人数は少なく、接待も軽くなりました。ソウルへのルートも3つに分割しています。それでも経費は大変で、一帯肥沃だった慶尚道の租税のすべてを日本の使節の接待に使っても足りなかつたと言われています。それ位気を使って日本との善隣友好をやっていたのです。

善隣友好時代の貿易はといいますと、日本からは南方産の胡椒・染料・香料と、それに日本産の銅であります。銅は朝鮮での産出量が少ない上に、15世紀初めに世界で初めて金属活字が鑄造され、印刷が始められましたが、日本からの銅が活字になりました。また、買物の食器にも使われました。反対に朝鮮からきたものでは、織綿品が大半を占めています。中でも木綿(明治の頃迄は不綿と呼ばれていた)は日本の社会を決定的に変えました。肌ざわりがよくて暖い木綿は、公家・武家の社会で高級衣料として珍重されました。木綿が日本で白給体制がとれるようになるのは、ずっと後の江戸時代(18世紀中頃)になってからです。そしてこの木綿の大量生産が可能になると船の帆に利用され、日本の近海航路が発達します。地曳網ができ、小魚をとる沿岸漁業が発達するのも木綿以後であります。日本の経済発展に欠かせない木綿が日本と朝鮮との善隣友好関係のおかげで、日本に伝わるのです。ところが、こういう事が全く日本の教科書には出てこない。代りに倭寇を持ち出して、朝鮮沿岸を荒しつづけて高麗丁奴が滅ぶ原因になったと書いてある。そんなのは歴史を歪めたといふことでもないことでありまして、160年間に亘る友好関係が保たれていたことの方が大事であります。

次に出てくるのは文禄・慶長の役です。江戸時代には、朝鮮からの通信使が12回来ており、釜山の甲斐樓館には、5～600人の日本人が派遣され、善隣友好関係が200年間も維持されました。鎖国だったといふのは間違いであります。明治維新まで200年も亘りますが、韓国同志でこんなに長い引、うまくいった歴史は他に例がないのです。にも関わらず、日本の教科書ではそのことを書いてくれません。たいへん残念なことです。歴史を一度むくと朝鮮との関係を抜きにするわけにはいかない色々な事があるのであります。これを無視してはならないと思っております。

私は、日本に長く住んでいますが、少年期を送らしてくれたのは朝鮮です。その後11年間、勉強し、活動し、子供を生んで育てているのはこの日本です。したがって私にとって両国はかけがえない存在で、心のふれ合う隣国になってほしいと念じつつ講演を終えさせていただきます。(文責：友の会事務局)

プロフィール

1920年朝鮮慶尚南道に生まれる。明治大学大学院(名古屋専攻)修士課程修了。現在は、明治大学講師。また、雑誌「季刊三千里」の編集長として活躍。主な著書に「朝鮮文化と日本」「広州三樓館の発見」「李王の謎」「古代朝鮮の歴史と文化」「李朝の通信使」など。

李 進熙氏

